

其の時の有様をやつて見様」

新吉は演壇の横脇に坐り込んであぐらをかいて了つた。

くたびれたのだ。

オン ア ボ ギヤ。

聴衆はいきり立つた。

巡査達は初めは笑つてゐたが、あんまりどうどうするので職責の手前昂奮してゐた。

『之から觀音經でも讀んで聞かすべし』

新吉は坐り込んだなりに觀音經をやり出した。

主催者の學生が紙片に書いたものを持つて駆け付けた。

『止して下さい、壇を降りて下さい』と泣きつく様に言ふ。

觀音經は終りまで讀まないと言つた。

まだ豫定の一時間は饒舌つてゐないと新吉は思つた。

聴衆の罵り雑言が霰の如く場内を清く蒸した。